

学級内の対人交流を促し、承認感を高めるグループ・アプローチ ～ ラボラトリー体験学習の実践～

1 学級集団の状況（高等学校2年生 女子34人）

本学級は生活情報科で全員が女子生徒である。明るく元気な学級であるが、学級内の人間関係を見ると、外見におしゃれな生徒たちの集団とおとなしい生徒たちの集団とで分かれており、更にそれぞれが数人ずつのグループに分かれている。清掃時においては、同じ清掃区域であっても、所属するグループが違くと、互いに話しかけず黙々としており、交流する様子は見られない。1年次には勢力争いがみられたが、数人の生徒が退学し、2年次ではグループ同士が反目したり牽制したりすることは見られない。ただし、生活情報科は各学年1学級なので3年間クラス替えがなく、また、グループ内では時々衝突やいざこざが起き、生徒は学級内の人間関係に随分気を使っている様子である。

5月下旬の修学旅行後、「Q-U」を行ったところ、学級生活満足群22%、侵害行為認知群6%、非承認群38%、学級生活不満足群34%であった。非承認群と学級生活不満足群を合わせて、学級内での承認感を感じていないと思われる生徒が72%いることが分かった。

このため、学級内の対人交流を促し、承認感を高め、いごちのよい学級をつくることを目標に、グループ・アプローチの一つである「ラボラトリー体験学習」（以下、「ラボ体験学習」と表す）を実施することにした。

本実践を進めるに当たって、A子、B子、C子を抽出生徒とした。基本的な生活習慣が身に付いているA子は、手先が器用で発想も豊かであるが、おとなしい性格であり、非承認群に属している。感情の起伏の激しいB子は、自分の主張が通らないことや、理不尽だと思うことがあると、自分の感情を抑制することができなくなり、髪の毛をかきむしったり、泣きわめいて早退したり、その対応が難しい生徒である。C子は太った体形を気にしており、他の生徒の目に触れぬよう、朝早い時間に登校している。1年時にはその外見を級友にからかわれたことがあり、退学することまで考えた。手の甲には自傷行為と思われる×印の傷跡がある。

2 実施した場面と時期

月	主な行事	活動の場面	ね ら い	内 容
6	修学旅行	① LT	対人交流, 自己理解	「匠の里」(本文参照)
10	体育大会	② LT	コミュニケーション	「流れ星」(本文参照)
1		③ LT	合意形成	「好きなプロスポーツは？」(本文参照)

3 実践

ラボ体験学習の内容は、ねらいに基づいてグループで実習（エクササイズ）を行い、そのときのグループの動きや個人の感情を振り返り、それらを互いに伝え合うことで自己理解や他者理解を深め、人間関係づくりを促進するものである。実習によっては、参加者が体験からの学びを広げたり深めたりして一般化することを促進するために小講義を行う。

構成的グループ・エンカウンターと同様のグループ・アプローチであるが、筆者の経験から、構成

的グループ・エンカウンターより自己開示が少なくても実施できる点が、初めて体験する生徒や実施する教師の抵抗感や心理的な負担を少なくすると考えた。本実践においては、星野欣生・津村俊充『Creative School』（プレスタイム、2003）からエクササイズを引用し、学級の状況に合わせて少しアレンジして実施した。

(1) 活動①「匠の里」

4月当初に実施しようと考えていたが、5月下旬までのLTは、修学旅行の準備で忙しく、なかなか実施できなかった。修学旅行では、気の合う小グループ内での交流はあっても、学級全体で触れ合う様子はなく、移動の際のバス内では元気な生徒がはしゃいでいるだけといった雰囲気であった。

前述したとおり、修学旅行後に行った「Q-U」の結果から、学級内での承認感を感じていないと思われる生徒が多数いることが分かったことを踏まえて、学級内の対人交流を促す目的で、本エクササイズを実施した。

ア ねらい

- ・ 互いに協力する体験を通して、対人交流を促す。
- ・ グループで活動しているときの自分の動きに目を向ける。

イ 活動の内容

- ・ ラボ体験学習の進め方として、「グループ活動を体験し、“今ここ”での心の動きについて振り返り、互いにそれを分かち合い、自ら気づき学ぶ」ことを説明する。
- ・ エクササイズのねらいを示し、課題の内容やルールを説明する。1グループ5～6人の6班編成とした。グループの課題は、各メンバーに3～4枚ずつ配布された情報カードに書かれている「匠の里」に関する断片的な情報（例えば、「『染めものの家』の南には、『機織りの家』があります」）を口頭で伝え合い、情報交換しながら「匠の里」の地図を作り、問題（例えば、「『匠の里』の西に建っている家はどの家ですか？」）の答えを求めることである。
- ・ 各グループごとに、情報を口頭で伝え合いながら、問題を解決する。
- ・ 自分の活動の様子や感じたことを振り返り、その後、グループのメンバー同士で発表し合い、分かち合う。

ウ 参加者の様子と課題

エクササイズを行ったグループは、友だち同士ではなく、名簿番号順で組んだのであるが、おおむねどのグループも積極的に課題に取り組んでいた。担任は、情報交換がスムーズに進むだろうかと心配していたが、自然に進行役も決まり、話し合う姿が見られた。

しかし、うまくグループ活動が進まず、担任が介入したグループがあった。抽出生徒のB子と、日ごろから自分の感情をストレートに出したり友達を独占しようとしたりして孤立がちなD子や、自己中心的なところがあり周りの級友が随分気を使っているE子がいたグループである。メンバー6人のうち、D子とE子の2人には参加意欲がなく、非協力的な態度をとっていた。他のメンバーは、D子とE子に参加を促すことができず、押し黙っていた。担任がいつ介入しようかと様子をうかがっていると、D子が自分の情報カードを見ながら、「これだけじゃ分からん」と発言したことに対し、B子が、「当たり前じゃん。自分の情報だけで分かるわけないじゃん」と言い、さらに、D子とE子に向かって、「ちゃんとやらんとおもしろくないじゃん」と言った。これを受けて担任が介入し、D子とE子の情報カードを残りの4人に配り、その後はB子がまとめ役になって進めていった。実施後の振り返り用紙には、同じグループのメンバーから、「B子がいろいろ言ってくれて助かった」、「B子のてきぱきしたところが役立った」、「B子が解決の方向を示してくれたことがよかった」と、B子の

行動を評価する言葉が寄せられ、分かち合いの際に、B子にフィードバックされていた。

また、A子はグループの進行役を務め、同じグループのメンバーから、「A子の頭の良い発言が役立った」と評価され、A子も「いい雰囲気楽しかった」と述べていた。

C子はグループの活動について、「はっきりした積極的な発言が多く、スムーズに進んだことがよかった」と、積極的に発言することについての気付きを得ていた。

振り返りにおける質問の結果と生徒の主な気付きについて、表1、表2に表す。

表1 「匠の里」振り返りの結果

	全くできなかった	あまりできなかった	まあまあできた	十分できた
自分の意見や考えを述べることができましたか	9%	22%	44%	25%
メンバーの意見や考えを聴くことができましたか	0%	9%	66%	25%

表2 生徒の主な気付き

<p>< 発言に関する気付き ></p> <ul style="list-style-type: none">・ はっきり発言することが必要だと思った。・ 話し合えばよく分かり合える。 <p>< 友人関係に関する気付き ></p> <ul style="list-style-type: none">・ このクラスのみんなは、誰とでも仲良くできると思った。・ 普段あまり話さなかった子たちと話せてよかった。 <p>< 協力することに関する気付き ></p> <ul style="list-style-type: none">・ 答えは合っていなかったけど、みんなで協力しながら楽しくできたのでよかった。・ 何事にも意欲的に取り組むことの大切さを学んだ。
--

表1の結果を見ると、「十分できた」と「まあまあできた」を合わせて、自分の意見や考えを述べることでできた生徒が69%、他のメンバーの意見や考えを聴くことでできた生徒が91%であった。問題解決型のエクササイズでは、課題が明確でその答えも一つであり、自分のもっている情報や考えを言わなかったり、他のメンバーの情報や考えをしっかりと聴かなかったりすると答えが求められないため、積極的に情報交換したことがこの結果に表れていると考えられる。

また、各グループの様子については、「いい雰囲気だった」、「穏やかな空気だった」、「仲良くできた」、「みんな思ったことをどんどん言えた」などの感想が多く、おおむね順調にグループ活動が行えたようである。エクササイズについては、「楽しかった」、「けっこうおもしろかったのでまたやりたい」などの感想が多く、生徒たちに好評であった。

表2の主な気付きを見ると、普段は言葉を交わさない級友と話すことができたことを前向きにとらえ、話し合うことでお互いの理解が深まることを感じとっていることが分かる。そして、課題の解答の正誤よりも、課題を解決する過程にきちんと目を向けることができたことが分かる。

しかし、分かち合いにおいては、うまく発表し合っているグループがあれば、照れくさがったり言葉に出さずに振り返り用紙をそのまま見せたりして、うまく発表できないグループもあった。ラボ体験学習に慣れていない段階においては、分かち合い自体に抵抗があるので、分かち合いの際には、グループ内で順番を決めて、「1番の人から発表してください」など、筆者がもっと細かく指示を出す必要があることを感じた。

(2) 活動②「流れ星」

9月に行われた文化発表会では、クラスの企画として、アイスクリームの模擬店を開き、体育大会では、大きな応援パネルを製作し、クラスのまとまりを実感することができた。これらの学校行事の振り返りにも、「すごく盛り上がっていた」「クラスの団結力が高まった」「準備から片付けまで、みんな役割の仕事をしきちんで行うことができ、なかなかよい結果で終わったと思う」「いろいろな子と仲良くなれたからよかった」などが書かれており、学校行事には生徒に与える大きな力があることを改めて感じた。

しかしその後、陰口やうわさ話をもとに、グループ内での人間関係に摩擦が生じるケースがしばしばあった。女子同士の争いに男性である担任はどう介入したらよいかちゅうちょしたが、見守るように程よい距離をとることに努めた結果、一部のケースを除いて、当事者同士が正面から向き合って話し合い、お互いの誤解を解消することができた。擦れ違いや誤解に端を発したこのような学級の状況を踏まえて、コミュニケーションをテーマとした本エクササイズを実施した。

ア ねらい

- ・ コミュニケーションについて学ぶ。
- ・ 人それぞれの言葉の受け取り方や表現の仕方の違いなどに気付く。

イ 活動の内容

- ・ エクササイズのねらいを示し、「お互いが分かり合うこと」について考えさせる。
- ・ 担任が口頭で順番に伝える「流れ星」に関する情報（例えば、「用紙の右上の隅から、左下の方に向けて、流れ星が一つ落ちてきました」、「その星の下に一軒の家が建っています」、「その家の前には大きな池があって、アヒルが3羽泳いでいます」、「その家の後ろには、大きな木が一本立っていて、その木の所に三日月が見えています」等）を絵で表現する。
- ・ 近くの3～4人でグループをつくり、描いた絵を見せ合う。
- ・ コミュニケーションにおける問題点について振り返り、その後、グループのメンバー同士で発表し合い、分かち合う。

ウ 参加者の様子と課題

「流れ星」の絵を描いているときは、一言の情報も聞き漏らすまいという雰囲気の中、全員がとても集中して真剣に描いていた。彩色については何も指示しなかったが、積極的に色を塗っていた生徒もあり楽しそうであった。

担任が描いた絵を示したときは、「えーっ」という声が揚がり、4人グループで見せ合っているときも、同じ情報を全員が聞いて描いた絵であるのに、それぞれが随分異なった絵（図1、図2）になっていたことに素直に驚いていた。



図1



図2

C子はこのエクササイズを通して、「人それぞれの思いが違うことがすごくよく分かりました」と振り返り用紙に述べていた。

振り返りにおける生徒の意見や主な気付きを表3に表す。

表3 「流れ星」振り返りの結果

- <情報の伝え手の問題点・改善点>
- ・ 物語っぽく話すと分かりやすいと思う。

- ・ 大きさや形，向きなど，もっと細かく詳しく正確に言えばよかった。
- <情報の受け手の問題点・改善点>
- ・ 自分の考えを入れずに，相手が描きそうなものをイメージする。
 - ・ 集中して聴く。はっきりしていないことについて質問をする。
 - ・ 他人の絵を見てしまい，それをまねてしまった。
- <主な気付き>
- ・ だって絵だもん，合うことはないよ。人の気持ちと一緒にさ。描くものはその人が見てきたものだったり，経験だったり。だからみんな違ってるんだよ。そして，それらを言葉で伝えることは大変だと思った。
 - ・ 同じことを言っても，人それぞれ感じることは，聞く人の数だけ違ってくるんだと思った。一人一人違う考えをもっていることが改めて分かった。
 - ・ 同じ題なのに，みんなけっこう違う感じの絵になっていた。みんなそれぞれ個性がしっかりあるんだなあと思った。
 - ・ 一番初めに描いた星によって，後に追加していく物の大きさとか描く場所とかがすごく影響を受けるなと思った。

同じ情報を聞いても，その受け取り方や表現の仕方が随分異なることを気付かせるのに，絵を描いて比較する方法は，一目瞭然であり，とても分かりやすかった。それが生徒たちの素直な驚きや気付きにつながっていったのであろう。

情報を伝える側は，情報を機械的に伝えるのではなく，ストーリーとして伝えた方が分かりやすく，受け取る側は，相手の立場になって考え，集中して聴き，全体を見通すことが大切であることに気付いている。

さらに，表現の仕方の違いの背景にはその人の人生経験が大きくかかわっていることや，自分の気持ちを言葉で人に伝えることの難しさ，情報の最初の受け止め方が後々まで大きく影響することなど，より深く考えることができたと思われる。

問題点としては，担任がこのエクササイズを実際に経験しておらず，実施したのも初めてであり，要所要所のポイントが分からず，担任が感じたことをうまく生徒にフィードバックできなかったことが挙げられる。

(3) 活動³ 「好きなプロスポーツは？」

2学期末のクラスについての感想を見ると，「明るい雰囲気でよい」，「昨年よりもっともっと元気になった」，「安心できる」，「昨年よりみんなと話せるようになった。友だちも増えた」などが書かれていた。しかし，その一方で，「昨年と比べてだらだらしている感じがする」，「落ち着きがなくなった気がする」，「うるさい感じがする」といった感想も見られ，学校行事やラボ体験学習を通して，お互いに話す機会が増え，対人交流が進んでいるものの，学級についての評価に食い違いが見られた。

そこで，学級集団の中において，自分の気持ちだけでなく，他者がどのようなことを感じて動いているかについて意識させることをねらいとして，南山大学人間関係研究センター第59回人間関係講座において，担任が体験したコンセンサス（全員の合意）のエクササイズをアレンジして実施した。

ア ねらい

- ・ グループ・プロセス（各メンバーの感情やグループの動き）に目を向ける。

イ 活動の内容

- ・ エクササイズのねらいを示し，課題の内容やグループ決定の際の留意点を説明する。
- ・ グループの課題は，スポーツに関する意識調査において，人気があった順番に，大相撲，プロ野球，プロサッカー，プロゴルフの4競技の順位を決定することである。留意点として，多数決ではなく全員が合意して決定することや，論理的に考えることは大切であるが各メンバーの感情やグループの動きに十分配慮することなどを挙げた。

- ・ 各個人の順位を決定した後，グループをつくって意見交換し，全員の合意に基づいて，グループの順位を決定する。
- ・ 自分の活動の様子や感じたことを振り返り，グループのメンバー同士で発表し合い，分かち合う。

ウ 参加者の様子と課題

各個人の順位を決定した後，担任がグループのメンバーを発表すると，2，3人の生徒から仲の良い者同士でグループをつくりたいという声が揚がった。普段の人間関係と違ったグループに身を置くことへの抵抗であった。その後，担任が示したグループで活動を始めたが，ある1グループでは，納得するまで話し合う雰囲気ではなくぱっぱと決めてしまった様子であった。その他のグループでは，活発に意見交換がなされていた。

各グループの決定を黒板に板書し比べたところ，全ての順位が等しいグループはなく，どのグループも正解の発表に興味津々の様子だった。その結果，6グループ中全て正解だったグループはなく，選択肢が4つだけなのに全て正解することの難しさを生徒たちは感じとっていた。

C子の振り返り用紙には，「自分の意見を少しでも信じた方がよかったです」と書かれており，自分の考えを積極的にアピールしていたら正解できたという残念さと，自分を信じることの大切さの両方を感じとっていたことがうかがえる。

振り返りにおける質問の結果と生徒の主な気付きについて，表4，表5に表す。

表4 「好きなプロスポーツは？」振り返りの結果

	全くできなかった	あまりできなかった	まあまあできた	十分できた
話し合いに参加することができましたか	3%	10%	43%	44%
プロセスに目を向けることができましたか	0%	10%	67%	23%
全員の合意による決定ができましたか	0%	10%	43%	47%

表5 生徒の主な気付き

- ・ たった4つしか選択肢がないのに，みんなばらばらになってすごいなあと思った。
- ・ 人の意見を聴くとそうだなあって思う。よく考えるとおもしろい。みんないろんな考えがあるなあって思った。人それぞれやっぱり考え方は違う。
- ・ みんな意見がばらばらで個性的だと思った。
- ・ 意見を言い合っていると，やっぱりその人その人違うんだなあって思った。

表4の結果を見ると，「十分できた」と「まあまあできた」を合わせて，話し合いに参加できたと答えた生徒が87%，プロセスに目を向けることができたと答えた生徒が90%，全員の合意による決定ができたと答えた生徒が90%ととても高かった。エクササイズを実施したのも3回目であり，初めてのグループにおいてもスムーズに話し合うことができるようになってきたと思われる。

表5の結果からは，それぞれの考え方の違いを改めて認識し，それを個性とみなす気付きも見られ，他者理解が進んでいる様子がうかがえる。

その一方，うまく全員の合意を得るためには，単に情報を提供するだけでなく，自分自身の考えをぶつけ合う自己開示が必要であり，うまく活動が進まなかったグループでは，自己開示しようとする気持ちが足りなかったものと思われる。

4 効果と課題

(1) 本実践の成果

3回のエクササイズを終え、これまでの全体の振り返りと「Q-U」を行った。振り返りの結果を表6、表7に、「Q-U」の結果を表8と図3、図4に表す。

表6 全体の振り返りの結果

関心をもって取り組むことができましたか	全くできな かった	あまりでき なかった	まあまあで きた	十分できた
	0%	7%	53%	40%
これからもやってみたいと思いますか	全くやりた くない	あまりやり たくない	少しはやり たい	とてもやり たい
	7%	20%	53%	20%

表7 生徒の主な気付き

- ・ あまり話をしたことの無い子と話すと、なんか新鮮な感じを覚えた。
- ・ あまり話さなかった子と、少しずつ話せるようになってきた。
- ・ 普段あまり話さない人に対しても、頑張って意見が言えるようになってきた。
- ・ こういうエクササイズを通して、他人の考えていることを知ることは大切だなと思った。
- ・ こういう意見を出すんだなと、普段話さない人のことが分かった。
- ・ 同じ意見でも、中身の考えが全く異なっている場合もあることが分かった。
- ・ グループになると自分はけっこう仕切る人(リーダー)の役が回ってくることに気付いた。
- ・ こういうふうにコミュニケーションをとることは必要だと思った。
- ・ もっといろいろな人とエクササイズをたくさんやって、仲間のきずなを深めたい。

表8 「Q-U」の結果

	学級生活満足群	侵害行為認知群	非承認群	学級生活不満足群
1回目(H15.5.29)	22% (7人)	6% (2人)	38% (12人)	34% (11人)
2回目(H16.1.16)	40% (12人)	3% (1人)	24% (7人)	33% (10人)

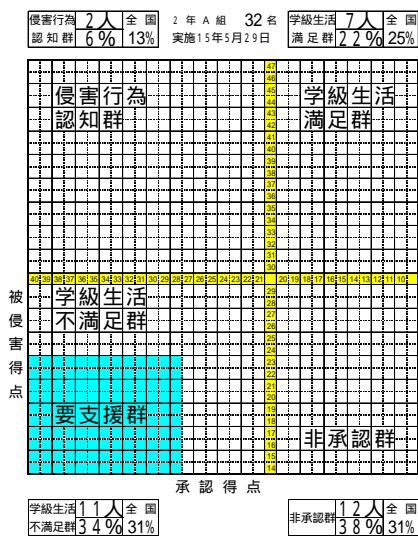


図3 ラボ体験学習実施前の学級の様子

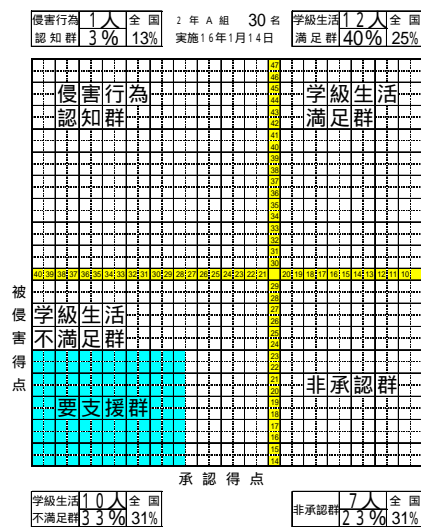


図4 ラボ体験学習実施後の学級の様子

表6の結果を見ると、ラボ体験学習に関心をもって取り組むことができたと答えた生徒が93%，こ

れからもやってみたいと答えた生徒が73%であり、ラボ体験学習に対する生徒の関心・意欲は高い。

表7の主な気付きにおいては、相手を理解するためには実際に話をすることが大切であり、発言することや聴くことの大切さについて再認識している姿が見られる。そして、グループ内の役割に関する自己理解を進めたり、一人一人の考え方や価値観の違いに気付くことで他者理解を深めたりしている様子が見え、さらに、対人交流を深めようとする意欲的な態度を見ることができる。

また、表8の「Q-U」の結果を見ると、学級生活満足群と侵害行為認知群を合わせて、学級内での承認感を感じていると思われる生徒は、ラボ体験学習の実施前後で、28%から43%と15%増加しており、この1年間で、学級内の承認感が高まったことが分かった。生徒たちは、今回実施したエクササイズや、修学旅行、文化発表会、体育大会などの学校行事を通して、グループ内や学級内でぶつかり合いながら、互いに認め合う関係を築き、行きつ戻りつしながらも、集団として成長することができたと考えられる。

(2) 学級の変容について

図3、図4における実施前後の学級の変化について、学級の生徒たちの姿や様子と重ね合わせてみて分かったことや担任が感じたことを以下に示す。

<承認得点が5点以上増加したおとなしいA子たち>

承認得点が5点以上増加した生徒が6人いたが、すべておとなしい生徒であった。それぞれの「Q-U」の結果を調べたところ、「私は学校・クラスでみんなから注目されるような経験をしたことがある」と「学校内に自分の本音や悩みを話せる友人がいる」の項目で、否定的な回答から肯定的な回答へと変化していた。

このうちのA子は、「去年以上にクラスに溶け込めた」と述べ、体育大会の応援パネル製作において、目立った発言はしないものの、授業後毎日残って製作に協力し、多くの生徒から感謝されていた。A子の承認得点は28点から36点に増加し、非承認群から学級生活満足群へと移行していた。学校行事で自分の役割を積極的に果たしたことが、承認感の増加につながったものと思われる。

この結果から、教師は日ごろ目立つ生徒に注目しがちであるが、おとなしくて目立たない生徒にこそ声を掛けたりその活動を認めたりすることが大切であることを再認識することができた。

<被侵害得点と友人関係とのかかわり>

被侵害得点が10点以上減少した生徒が6人いた。このうちの4人は、陰口やうわさ話、誤解などから友人関係でトラブルが生じたが、当事者同士が面と向き合って話し合い、お互いの誤解を解消することができた生徒たちである。この4人のうちのある生徒の感想には「友だちといろいろあって、対人面ではいろいろ苦労して勉強になった。まだまだ自分がちゃんとしていなくて倒れそうだけど、一歩だけ成長できたと思う」、「自分をしっかりもつことがやっとできてきた。嫌いと思った人も、その人自体が嫌いなのではなく、その時々がいやだったんだと気付いたことがよかった」と書かれてあった。残りの2人はそれぞれが属する小グループの中で、中心的な存在になっていった生徒たちであった。

その一方、このようなトラブルをいまだ解消できていない生徒や、生徒間の力関係で下にいると思われる生徒の被侵害得点は高く、不満足群に属していた。

< 「匠の里」から担任との接点が出来てきたB子 >

B子は1学期早々欠席が3日続き、担任が状況を尋ねると、「関係ないじゃん」と、担任を拒否する言葉が返ってきた。その後、最初の個人面接でも担任の質問に対し目を細めいやそうな顔つきで、「関係ないじゃん。何でそんなことを言わなきゃいかんの」との発言を繰り返し、面接にならなかった。

そのB子が、前述した通り、「匠の里」のエクササイズの際に非協力的な2人に注意しグループ活動を促したのである。担任に拒否的な態度をとっていたB子がこのような正義感をもって行動したことに、担任はとても驚いた。授業後、担任がB子に「さっきはどうもありがとう」と伝え、B子は、当たり前のことをしただけという様子だった。その後、B子の机の上に図書館から借りてきた「カッコーの巣の上で」の本が乗っているのを見かけ、担任が『カッコーの巣の上で』は映画にもなっていて、とてもいい映画だから観てみるといいよ」と声を掛けると、少し照れくさそうな表情を見せた。これ以来、B子からあいさつしてくれるようになり、B子とのつながりを感じられるようになった。

B子の各学期の感想には、「普段あまりしゃべらない人と話すことはいいことだと思う」、「みんなが力を合わせれば、楽しい思いをするんだなあと思った」と書かれており、この1年間で多くの気付きを得たものと思われる。しかし、教師の注意に対して素直になれない不安定さや、クラスについて「低レベル。会話の内容とかつまらないことが多い」と感じるような孤立感をいまだ抱えており、被侵害得点が16点から30点に増加し、非承認群から要支援群へと移行していた。

< 要支援群から学級生活不満足群へ変化したC子 >

1学期には、机に伏せたり、窓際で突っ立っていたりとふさがちな様子がよく見られた。窓際に立っていたC子が「ここ（3階）から飛び降りたい」と言ったり、友だちに、「明日から学校に行かなかったら、私の係の仕事を頼むね」とメールを送ったりしたときは、担任自身とても動揺した。

担任はC子に対し、C子の存在を認める働き掛けとして、生活情報科に関すること（被服の授業はどこの教室でやっているか等）をC子に尋ねるようにした。また、学級の生徒は基本的には姓で呼んでいたが、C子にはニックネームで呼ぶようにした。

2学期に入ると、ふさがこむことが少なくなり、固く暗かった表情が次第に和らいできた。被服製作が思うように進まず、登校を渋ったこともあったが、教科担任の細かい配慮で問題を解消することができた。3学期になると、C子は長い髪をおさげにしぼって登校するようになり、目の色が以前と比べとても明るくなってきた。

「Q-U」の結果については、承認得点が14点から18点へと増加し、被侵害得点が32点から21点へと減少した。「友人から認められている」、「認めてくれる先生がいる」、「無視されない」、「からかわれない」、「孤独感を覚えない」、「クラスの中で浮いていると感じない」といった項目で良い方向に変化していた。

(3) 今後の課題

ラボ体験学習を学校で実施する際の問題点としては、日常的に顔を合わせている生徒同士でグループをつくるので、顔見知りだと遠慮がちになったり、日ごろの人間関係の影響を強く受れたり、事後

の人間関係にまで引きずったりすることなどが考えられる。また、正解のある問題解決やコンセンサスのエクササイズでは、一度体験するとその答えが分かってしまい再実施できない場合がある。さらに、生徒に慣れが生じてくるとゲーム的感覚が強まる恐れがある。このため、学級の状態に合ったエクササイズを用いることが肝心であり、学級の状態に合わせてアレンジすることが必要である。学級の状態によっては、このようなグループ活動を実施しない方がよい場合もある。学級の状態を把握し判断するための尺度として、本実践でも使用した「Q-U」が利用できる。

本実践では、3回のラボ体験学習のエクササイズを実施した。それぞれのねらいについて深いレベルで生徒たちが考えたり感じたりするためには、グループの他のメンバーがどのような振り返りをしたのかを聴き、それを踏まえて更に自分が何を感じ何を思うか、自分の心の動きに目を向けることが大切である。十分な分かち合いを行うためには、その実施状況に合わせて、最初は対人交流のあるグループから始め、次第にそれ以外のグループでも活動できるようにグループ編成を考えたり、教師が望ましい振り返りのモデルを示したりすることが必要である。

次に、コミュニケーションのエクササイズ「流れ星」については、担任自身が体験していなかったため、エクササイズを進める上でのポイントが分からず、体験を通して感じたことを生徒にフィードバックすることができなかった。グループ・アプローチを実施する上でまず必要なことは、教員自身が体験してそのよさや有用性を感じていることである。いろいろな研修会に参加し、エクササイズの幅を広げる必要性を実感した。また、これから学校現場でこのようなエクササイズを広めていくためには、学校内で研修会を設けて、教員自身が体験できる機会をつくるのが大切である。

また本校では、LTの時間の利用に関して、学校行事や学年行事を設定することが多く、エクササイズを実施するLTの時間を確保することがなかなか難しかった。あらかじめ学級で使えるLTの時間を調べて年間計画を立て、それに従って実施することの必要性を実感した。

最後に、この一年間を振り返ると、女子クラスの担任を務めたのは初めてだったので、生徒たちとの距離のとり方や呼称の仕方、友人関係のもつれへの介入の仕方など、どうしたらよいか考えることが多々あったが、学級経営を行う上で、このラボ体験学習は担任の心の支えになっていたように思う。

特定のグループに固執しがちな状況を改め、気の合うグループからそれ以外のグループへと、活動できるグループの幅を広げていくことは、生徒個人の成長にとって非常に大切なことである。個々の生徒への配慮や働き掛けが必要であると同時に、集団を育成するために、「『烏合の衆』から『共通の目的をもった学級集団』へ」、「『固定したグループから成る学級集団』から『柔軟なグループを形成できる学級集団』へ」、「『固定したリーダーがまとめる学級集団』から『状況に応じたリーダーがまとめる学級集団』へ」といったグループの成長を支援するための働き掛けが、高等学校においても必要である。個人が成長することによって集団もまた成長するものであるし、集団によって個人が育てられるからである。これからも、人間関係づくりに関する幅広い知見についての研修を重ね、実践を積み重ねていきたい。

- <参考文献> 星野欣生・津村俊充『Creative School』(プレスタイム, 2003)
津村俊充・山口真人編『人間関係トレーニング』(ナカニシヤ出版, 1992)
津村俊充・楠本和彦編『体験学習実践研究 創刊号Volume1』
(南山大学人文学部心理人間学科津村研究室体験学習実践研究会, 2001)